文書作成モデルと思考様式、言語表現

Logic and Expressions of Japanese Sentence Expression Techniques

東京外国語大学教授
佐野　洋

東京外国語大学 総合国際学研究院 教授（情報工学）

sano@tufs.ac.jp　TEL 042-330-5367

1 文書作成モデル

1.1　表出過程の技法論

横井の文書作成モデル（[1]：14 頁）は、認識したり思考したりした内容の「表出過程の技法」論として位置付けることができる。人の認識と思考を「記号過程」と捉えたのはパースである（[2]）。言語は記号であり、記号過程は人の認識と思考の過程であるのだ。この視点からすると横井の表出過程の技法論は、ことばの表出の背後には、意識的な認識・思考過程があることを前提として、（1）認識・思考過程には段階性があり、（2）認識・思考の内容は、その段階に応じた表現様式や形式があって、（3）その表現様式や形式の表出は不可逆的な過程であるとする考え方である。認識・思考内容の段階に応じた表現様式や形式の表現特徴を明らかにすることが、文章の書き方を解き明かすことにつながる。

この点に於いて、文章を形態素にまで構成要素を細分化し、それら要素からなる構造をまた下位の要素とするような内包関係を作り上げる構造体として文章を捉えようとするアプローチと相違する（[3]）。ただ、森岡も『一体、正しい文を書くということは、思考力の問題であって、ことばの知識や小手先の技術で片付く問題ではない。粗雑な頭からは決して正しい文は生まれないし、正しい文の書けない頭には、決して正しい思考は生まれない。』（[3]：150 頁）と教える。横井は、文法論の視点ではなく、思考様式と表出する目的の視点から文章の書き方を見直したといえる。

なお表出過程には、言語行為と結び付けて「着想する」、「試みる日本語」、「表す日本語」、「伝える日本語」、「訳せる日本語」の各段階があると想定する（[1]、表 1）。これら名称は、文章術としての書き方（ライティング）に焦点をあてていることをよく現わしている。

表 1　ライティングステージ

書き方段階	着想 ⇒	試みる日本語 ⇒	表す日本語 ⇒	伝える日本語 ⇒	訳せる日本語

表 1 の各段階に対応する表現特徴は、文章術としての書き方（ライティング）規則として、列挙することができる（と考える）。なお、表現粒度の観点から、書き方を適用する主な単位は、段（いわゆる形式段と意味段を統一させた文章単位）である（[4]：38 頁）。故に、表出過程の技法論は、文書の書き方や文章の書き方ではなくて、段作文（パラグラフライティング）の技法論である。

1.2　ライティングルールの提案

平成 29 年度、Japio 産業日本語研究会ライティング分科会（以後、ライティング分科会）は、論じ方を類型化して、二つの主張の表明の仕方として整理した（[4]：50 頁）。主張には、共感を通じて納得してもらう共感技法と、意志をもって説得させる意志技法があるとした。平成 30 年度には、日本語に於ける論理的であることの検討を加えてライティングルールの提案を行った。この提案過程の中で意識されたのは、ライティングステージの違いに於ける思考や表出の態度の違いである。

ライティング分科会では、扱うビジネス文章とは、読み手に誤解なく情報内容を伝達することを旨とし、且つ

書き手の主張を含むようなタイプの文章であると考える。こうしたビジネス文章の機能とは、読み手に情報内容と主張が理解されて受容され、そして読み手の行動を引き起こすことである。ここで、表す日本語段階における読み手と書き手は同じであり、そうすると、この段階の日本語とは、自身が内容を理解し、そして受容できるような表現である。表 1 に表現特徴を加えて表 2 に示す。

表 2　ライティングステージと表現特徴

書き方段階	着想 ⇒	試みる日本語 ⇒	表す日本語 ⇒	伝える日本語 ⇒	訳せる日本語
表現特徴	独り言	メモ書き	思考内容を律する	情報の的確な伝達	多言語への中継ぎ

ライティングを担う書き手の態度は、(1) 根拠（共有知識や一般事実）で正しさを主張する、(2) 信念（理性的な情感や情意）で価値を主張することで共通する。しかし二つの技法は思考の仕方が違う。共感技法は、結論からその根拠を推し量る、または根拠を積み上げて結論に至るという様式であり、意志技法は、根拠から結論を導く、または結論を先行させ、根拠を後から理屈付けるという様式である。

これら思考様式の違いと、ライティングステージの違いからライティング分科会はライティングルール案を提示した。段タイプ（共感型と説得型）の違いに関係なく適用される基本ルールと、段タイプごとに適用される下位ルールがあることを示した（[4]：68 頁～ 70 頁）。

書き手の態度の第一点目（根拠）は、思考の様式に関係することで、合理的な思考態度である。第二点目（信念）は、表現の様式に関わり合目的な表現態度である。後者は、具体的な表現方法で合目的であるからライティングステージが異なると表出方法も違うと考えられる。本稿では、思考の様式を再確認し、その思考様式とその表現の仕方の特徴（文法論的で具体的な日本語表現特徴）をライティングステージと対応させることで、表現の特徴を明らかにする。

1.3　認識・思考の類型と対応

ここで（著者の裁量で）各段階を認識・思考の類型と対応させると、「着想する―発想、創造」、「試みる―内観、省察」、「表す―言明、陳述」、「伝える－主張、見解」、「訳せる－転換、共有」などの観念で示すことができる（表 3）。

表 3　ライティングステージと認識・思考

書き方段階	着想 ⇒	試みる日本語 ⇒	表す日本語 ⇒	伝える日本語 ⇒	訳せる日本語
表現特徴	独り言	メモ書き	思考内容を律する	情報の的確な伝達	多言語への中継ぎ
認識・思考	発想、創造	内観、省察	言明、陳述	主張、見解	転換、共有

合目的な表現態度の観点で、「表す日本語」の認識・思考である言明と陳述を考える。日本語という言語を用いて、自らの考えや理解を正確に表現する、自問を通じて自らの表現を正しく叙述する、といった役割を担う日本語表現である。思考の論理を強く意識する日本語シンキング能力とも言い換えられるだろう。

「伝える日本語」の認識・思考である主張と見解については、日本語という言語を用いて、自己の主張を正確に表現する、他者に正しく伝達する、他者の表現を正しく理解する、といった役割を担う日本語表現である。伝達の論理を自覚する日本語コミュニケーション能力と言換えることができる。なおコミュニケーションには、一方向コミュニケーションと双方向コミュニケーションがあって、その表現戦略は異なる。

以下、次章では、合理的な思考態度について根拠とその正しさに関わる思考（推論）様式について概観する。3 章で合目的な表現態度について、思考（推論）様式を選択する根拠（信念）の違いが、どのように表現枠組み（言語表現の類型）に影響を与えているのかを説明する。4 章では、日本語表現がライティングステージとどのように関連付けられるのかをまとめ、「表す日本語」と「伝える日本語」段階における表現形式とその特徴を示す。

2　根拠と正しさ

2.1　思考（推論）様式

2.1.1　演繹的推論と帰納的推論

推論は、既知である前提をもとにして、それら前提を根拠として結論を導き出す、論理的に統制された思考過程（[5]：2 頁）である。論証保障の観点から帰納推論は論理的でないとされている。前提が真であれば結論が真であることが保証されるような推論を妥当な推論といい（[6]：42 頁）、論理的な論証は、演繹的な論証である。

一方、帰納的な推論は、蓋然的な推論とされ、経験から独立に成り立つような論理的な推論とはみなされないからだ（[5]：4 頁）。

2.1.2　分析的推論と拡張的推論

パースにいう論理学の推論を図 1 に示す（[5]：30 頁）。米盛（[5]：32 頁）によれば「演繹的推論は、前提の内容に暗々裏に含まれている情報を解明し、それを結論として導き出す分析的推論」である。そして「前提の内容を超えた知識の拡張がないことが特徴で、よって前提から必然的に真となる結論が導かれるという論理的な特徴がある」と指摘する。前提が真であれば結論も真であるという必然性の関係が成り立つ。

これに対して帰納的推論は、「経験にもとづく推論であり、経験的事実の世界に関する知識や情報を拡張するために用いられる推論」([5]:33 頁) である。そして「前提の内容を超えて、前提に含まれていない新しい知識や情報を与える」という。前提が真であっても結論が偽になることがあり得るので蓋然的な推論である。

なお、パース（[5]）によるとアブダクションは仮説を作る推論である。ライティングプロセスに合わせると着想段階と思われる。思惟特徴は内観や省察であろうし、その表現特徴はメモ書きといった行為なので、ここでは取り上げない。帰納とアブダクションの違いは、[5]（81 ～ 102 頁）に詳しい。

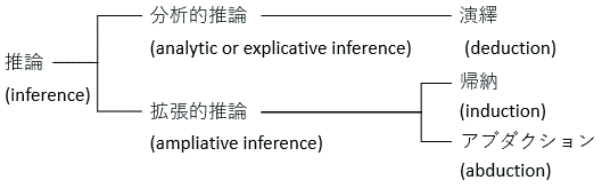

図 1　推論の分類（[5]：30 頁から引用）

2.2　分野の思考（推論）様式

2.2.1　科学の思考様式

合理的な思考態度として内容中立な態度が求められる分野は科学である。科学的思考を形成する推察方法には、演繹的推論を使う推察方法と帰納的推論を用いる推察方法の二種類の方法から成り立っているとされる（[5]：3 頁）。近代科学の方法論は、演繹法による論証と、帰納法による実験と言い換えることができる仮説演繹法である（[7]：112 頁）。帰納的な仮説の提示を演繹的な推論に拠って立証しようとする方法論である。

演繹法だけが妥当な推論を導くことから、論証に替えて反証という手続きを示し、帰納的な推論過程を排除した方法論を提示したのはポパーである（[7]：160 頁、[8]）。これに対し、パースは帰納的推論（だけでなくアブダクション）も論理的な思考過程であるとした（[5]：118 頁）。野家（[7]：124 頁）は、「科学の歴史の中ではアナロジーやメタファー（隠喩）が理論的考察の中で使われ、それが発想の飛躍をもたらして新たな発見にいたる」ことを指摘し、仮説演繹法が万能の方法論でないことを述べている。

2.2.2　ビジネス文章の思考様式

例えば [9] は、ビジネスを指向した論理的な考え方として、演繹的思考法と帰納的思考法を説明する。この説明の中では演繹法と帰納法を、科学的な思索で挙げたような正しい結論を導き出す方法ではなくて、論理の筋道を相手と共有し、様々な可能性を検証するためのコミュニケーションツールとして捉える。[9] によれば演繹的思考法を「法則やルールに物事を当てはめて結論を出す論理展開パターン」と説き、帰納的思考法を「複数の物事から共通点を導き出して結論を導き出す論理展開パターン」と説明する。併せて、様々なビジネスシーンを示しながら、具体的な文章の展開例を挙げて説明している。

演繹的思考法においては、前提の事実性に留意することを指摘し、帰納的思考法では、仮説を正当化する例証の不確実さに気を付けることなども併せて説明する。とくに、法則やルールの中に価値観も含めていることがビジネス指向を特徴づけ、当該分野で役立つ指南となっている。

2.2.3　ビジネス口語（説得）の思考様式

双方向性のコミュニケーションの役割りを強く意識し、内容の伝達だけでなく、情意の観点に重きを置いて、相手の行動実現に至ることを目的とした思考様式や表現技法の説明が（[10]）にある。交渉という場面性の重視に拠り、いわゆる説得の戦略の文脈における、相手の心理特徴までも含み込む思考様式や表現技法の類型化だ。

内容を説明する際に、論理性は勿論必要であるのだが、それは戦略の部分であり、相手の心理学的なタイプ分類、そして人の情動や感情の重要性などを思考様式と絡めて説いている。共鳴や共感もキーワードとして取り上げら

れており、人は自分が思うほど合理的な思考ができないことや感情中立の態度で物事を受容するのでないことを縷々説明している。

3 信念と正しさ

3.1 信念と実在

色は物理的実在ではなく、人間の感覚器官と脳で創られた概念であるし（[11]：12 頁）、物理的に形を持って存在してはいても、人はその物体の形状を正確に捉えているわけではない（[12]：93 ～ 103 頁）．眼球の網膜上には 2 次元画像が映っていて、3 次元画像を構築しているのは脳である（[13]）．既にルネサンスの頃、ガリレオは物の物理的な実在性質を一次性質とし、人の感覚を通じてのみ現れる見かけの性質を二次性質として区別した。そして諸現象の定量的な測定に基づく近代科学を切り拓いたのである（[7]：64 頁）。その後、デカルトは物心二元論を確立する（[7]：82 頁）。この考え方は西洋的思惟特徴のひとつとなっている。

一方インド的思惟は、徹底した実在論哲学であるといい（[14]：19 頁）、知られるもの、言語表現されるものはすべて実在するという。「生きた主体なしに空間も時間もありえない」（[15]：24 頁）のであって、こうした一元論的な考え方も肯首できる。例えば「牛」は牛性という普遍性によって存在するといい([14]:45 頁)、個に普遍性が内属するという。

3.1.1 モノの見方

本論は、パース（[2]）に従い、認知・認識とは「あるモノをあるモノで置き換える」（記号化）ことであり、そうして思考は「置き換えられたモノの操作によって状態の変化を理由づけること」であると考える。そうすると実在性だけでなく、個別性と一般性や、事実性（例えば「生の事実」と「制度的事実」など、[16]：132 頁）も信念に影響を与え、思考の表出や情意の表出にその特徴が現れる。

[17] は、時間経過の認識の違いから時間依存の性質を持つモノの捉え方を示した。モノは外形（幾何）存在であるか、役割（機能）存在であるかという違いで、選好する表現の違いがあることを示している。表 4 にまとめて示す。

表 4　モノの見方の違いと選好する表現

モノの見方	モノは外形（幾何）存在	モノは役割（機能）存在
認知の仕方	知覚感覚と認識	認識
モノ表現の時空間特徴	線分時間、三次元空間	瞬間時間、二次元空間
時間経過とその認識	モノの位置変化（移動認識）	モノの質変化（結果認識）

表 4 は、モノを頼りにした人の時間経過の認識の仕方からまとめたもので、出来事（コト）の認識の仕方には、位置変化（移動認識）と質変化（状態認識）があることを示している。認識の違いは表現の特徴に結びつき、ライティング分科会の報告書で示したように、「～がある」と「～である」の違いがあることがわかる（[4]：79 頁）。

3.1.2 思惟の比較

ライティング分科会では、対象物の実在性の意識の違いを検討し、根拠を（表す語彙や表現が参照する概念や観念を）実体と見做すのか、関係を（同左を）実体と見做すのかの違いを明らかにした。そして報告書（[4]：59 頁）の中で中村（[18]：39 頁～ 136 頁）を参照し、西洋的な思惟方法と比較しながら、インド的な思惟方法の特徴をまとめた。表 5 に再掲する。詳細は [4] を参照されたい。

表 5　思惟特徴とその対比

	西洋的思惟	インド的思惟
実体性	具体概念が実体性を有する	抽象概念が実体性を有する（[18]：54 頁）
創造するモノ	外形（幾何）存在	役割（機能）存在（[19]）
叙述	個物、特殊物（観念、関係は別表現）	観念、関係（個物、特殊物を無視）（[18]：79 頁）
創造する時間	線分	瞬間、恒常（[19]）
叙述	能動的な動詞文	静止的な名詞文（[18]：113 頁）
意義	それぞれの語が基本意義を担う	語は関係意義を担う（[18]：82 頁）
叙述	経験現実の参照物	推察による参照物
肯定概念と否定概念	独自存立（善と悪、徳と罪）	相互限定的（善と不善、徳と不徳）（[18]：69 頁）

3.2 正しさの表現

3.2.1 表現枠組みの特徴

正しさを思考する二つの思惟様式が在ることを前提

に、本節では、（幾分、短絡的に）西洋的思惟を「モノがある」思考様式と見做し、インド的思惟を「モノである」思考様式と措定する（ひとつの仮説。後の 3.2.2 節で一層、考えを飛躍させ、前者を英語の特徴、後者を日本語の特徴として取り立て、言語表現上の特徴を探る）。

モノの見方の違いと時空間特徴や時間経過を表す表現の違いから、外形（幾何）存在の思考世界と役割（機能）存在の思考世界があると考えられる。まず、外形（幾何）存在の思考過程はモノを、感覚的な具体物－個別の時空間内の外形を持った「モノがある」と考えようとし、それ故、普遍の関係が実在することを前提に（仮定して）、対象（モノ）の実在性を希求する。

一方、役割（機能）存在の思考過程はモノを、認識的な抽象物－個別の時空間に非依存の役割を持った「モノである」と考えようとし、拠って、普遍の対象（モノ）が実在することを前提に（仮定して）、関係の実在性を希求する。これら思考過程の特徴を、思惟様式と時間様式、推論様式に分解して点検すると以下のようになる（表 6）。

時間経過認識には二重性がある（[17]）ので、時間推移的であることで、経験する現在時間と想像・創造時間を分ける観念が発達する。なお時間推移的であることは、必ずしも因果推移的ではないし論理的でもない。因果性は、近接性、時間の先後や恒常性などで特徴付けられるものである（[20]）。

表 6　思考の様式特徴

	モノがある	モノである
思惟様式	前提を存在させ、関係（規則）を適用して結果を示す 【分析的推察・演繹的推察】	結果から前提を推察し、関係（規則）の存在を示す 【拡張的推察・帰納的推察】
時間様式	線分時間（ ------> ） 【前提から結果へ推移、連続時間】	瞬間時間（ -> ） 【結果から前提を推察、非連続時間】
推論様式	(1) 前提⇒結果（普遍の関係が在る） (2) モノが在る（前提） (3) 関係を適用し、結果が生じる（結果の実在を主張する）	(1) モノで在る（前提）（普遍のモノである） (2) 結果が生じている (3) 規則（前提⇒結果）を推察する（関係の実在を主張する）
戦略様式	時間推移的、意図（説得）、目的説得、「はずだ」指向	超時間（総合）的、共感（納得）、目的共有、「べきだ」指向

表中の戦略様式にある、超時間（総合）的とは、異なる文脈の様々な「前提ならば結果」の例を取り立てて関係（規則）の存在を主張することをいう。

3.2.2　言語的な表現枠組みの特徴

前の 3.2.1 節の思考様式の議論を基に（そして、「モノがある」思考様式を英語に、「モノである」思考様式を日本語に対応させ）、言語表現上の緒特徴に対応させた表を示す（表 7）。

表 7　思考様式の表現特徴

	英語（モノがある）	日本語（モノである）
機能特徴	具体物のモノ⇒動き Object ⇒ Motion 集めたモノ⇒属性 Collection ⇒ Property	普遍物のモノ⇒評価 Topic ⇒ Comment 具体物のモノ⇒対比 Object ⇒ Contrast
構造特徴	主語－動詞－目的語（SVO）	提題語－補語－述語（TCP）
表現特徴	位置変化表現（移動表現）を選好	質変化表現（状態表現）を選好
意味特徴	知覚感覚存在と認識存在の区別 （内属属性と外属属性の弁別）	知覚感覚存在と認識存在の同一視 （内属属性と外属属性の非弁別）

機能特徴は、モノの見方とモノを頼りにした人の時間経過の認識の仕方から、演繹的に推察できる表現特徴を表した。表中の機能特徴の上段は基本的な出来事表現の機能特徴を示す。下段は応用的な機能特徴である。表現特徴の枠で簡単に示しているが、いずれの枠も傾向（偏向）性を示すもので、日本語に位置変化表現がないとか、英語に質変化表現ないと言っているわけではない。例えば Object ⇒ Motion の Object に意志性を持たせれば Agent ⇒ Action だし、Object ⇒ Contrast の Object を十分個体化した上で意志性を持たせれば Agent ⇒ Action となる。

なお、意味特徴はモノ（やコト）の性質表現という限定された事柄を表している。内属属性はモノに元来属性している（と見做す）性質である。外属属性は認識者（話し手／書き手）が認める性質である。例えば「赤ワイン」の「赤」は内属属性を表し、「ワインが赤い」の「赤い」は外属属性を表す。英語では、後方から名詞を修飾する場合には（基本的に）外属属性を表す。例えば、習慣的に繰り返す起こることが、対象物に対して半ば内属属性化に用いられ、修飾パターンを作ることもある（to 不定詞の形容詞用法）。日本語では、前方から体言を修飾する形式に限定される。「赤いトマト」と「サラダが美味しいトマト」のように内属属性と外属属性を弁別して表さないからである。

4 表出過程の日本語表現

３章の分析を基にして、日本語表現がライティングステージとどのように関連付けられるのかをまとめ、「表す日本語」と「伝える日本語」段階における表現技法とその特徴を示す。根拠と信念の正しさの表出の違いが、如何に表現枠組み（言語表現の類型）に影響を与えているのかを観る。

4.1　表す日本語

表わす日本語段階では、認識・思考の類型を「言明・陳述」とした。言明や陳述では内容に中立であって、積極的な意志発露をもとに説得することや、思いの共有（共感）を通じて読み手に納得してもらうこともない。情意（意志や共感）に非依存の表現場面と考えられる。

4.1.1　「～がある」（具体概念）を用いる表現

具体概念が実体性を有する世界の表現では、位置変化を表現するので、作用を分析的な推察を通じて表す表現を考えればよい（表８）。なお、原因は一般的で、理由は個別的な関係の前提である。

表８　作用を分析的に表わす

論旨の展開枠組み	作用の表現戦略
［原因］⇒［結果］ ―― ［原因］がある □関係を適用する 故に［結果］になる	関係が一般的に在ることを前提に原因の存在を主張したり、固定的で百科事典的な階層概念をトップダウンに辿ったりする戦略
［理由］⇒［結果］ ―― ［理由］がある □関係を適用する 故に［結果］になる	関係が一般的に在ることを前提に理由の存在を主張したり、社会規範や一般的に為される習慣を使ったりする戦略

4.1.2　「～である」（抽象概念）を用いる表現

抽象概念が実体性を有する世界の表現では質変化を表現するので、結果状態を拡張的な推察を通じて表す表現を考えればよい（表９）。

4.2　伝える日本語

伝える日本語段階は、認識・思考の類型を「主張・見解」とした。目的を明示して意志を発露し、説得することや、できるだけ深い共感を得て、皆に納得してもらうことを目指す。情意（意志や共感）に依存する文脈である。

4.2.1　「～がある」を伝える表現

具体概念が実体性を有する世界の表現では位置変化を表現するので、行為を時間推移的な推察を通じて表す表現を考える（表 10）。事情は広く認められる合理的な事実を表現し、意志は個別の時空間（時と場所）で成り立つような事実を表現する。

表９　（結果）状態を拡張的に表わす

論旨の展開枠組み	（結果）状態の表現戦略
［結果］である ―― ［原因］である □関係を例証する 故に［原因］⇒［結果］	同じ結果を引き起こす（仕組みや物の働きを示す）例を複数挙げることで、原因と結果（状態）を結びつける関係の存在を主張する戦略
［結果］である ―― ［理由］である □関係を例証する 故に［理由］⇒［結果］	類似の結果を引き起こす（社会規範や一般常識の）例を列挙することで、理由と結果（状態）を結びつける関係の存在を主張する戦略

表 10　行為を時間推移的に表わす

論旨の展開枠組み	行為の表現戦略
［事情］⇒［目的］ ―― ［事情］がある □事情で状況変化する 故に［目的］状態である	目的を明示し、目的に至る事情の存在を主張し、社会規則や一般に受容される事情で状況を変化させることで、事情と目的を結び付ける戦略
［意志］⇒［目的］ ―― ［意志］がある □意志で動きを為す 故に［目的］状態である	目的を明示し、目的を為す集団の意志の存在を主張し、被動対象のある動作・行為を完了させることで、意志と目的を結び付ける戦略

4.2.2　「～である」を伝える表現

抽象概念が実体性を有する世界の表現では質変化を表現するので、評価（結果）を総合的な推察を通じて表す表現を考えればよい（表 11）。解釈は誰もが納得する合理的な認識をいい、情意は個別事由を勘定に入れた認識である。

表 11　評価（結果）を総合的に表わす

論旨の展開枠組み	評価（結果）の表現戦略
［評価］である ―― ［解釈］である □関連を例証する 故に［解釈］⇒［評価］	同じ評価になる（社会価値観や一般化された価値の）例を複数挙げることで、解釈と評価を結び付ける関連の存在を主張する戦略
［評価］である ―― ［情意］である □因縁を例証する 故に［情意］⇒［評価］	類似の評価になる（常識判断や集団の判断の）例を複数挙げることで、都合と評価を結び付ける因縁の存在を主張する戦略

表８～表 11 の中の論旨の展開枠組みに現れるキーワードを取り上げると、「～がある」を伝える表現では、原因、理由、事情、意志の順序で客観性や合理性が低下する。「～である」を伝える表現は、原因、理由、解釈、

情意の順序で同様に低下する。これらキーワードの内実を批判的に検討する思考法がいわゆるクリティカルシンキングだろう。

なお、意志性を極端に重んじると、経験は個人間で共通するという信念につながる。私にできることはあなたにできるという信念である。一方、共感性に著しく偏ると感情は個人間で共通するという信念につながる。私に感じることはあなたも感じるという信念だ。柔軟性を欠く無批判な信念感からすると、いずれの立場も主観的である。

拠って情動という視点で、意志と情意は表裏の関係である。個人経験だけを根拠にして目的を頑なに主張することは、往々にして無理強いであるし、情感にのみ訴えて因縁を強いて認めさせることは、泣き落としである。しばしば日本語は主観的であるとされるが、同様に英語も主観的である。

5 おわりに

本稿では、合目的な表現態度（信念の正しさの様式と言語特徴）と、表現技法（論旨の展開と表現戦略）を結び付けて表現する方法論を示した。説明したようにマクロの論旨展開（例えば、筋書きの類型など）だけでなく、ミクロの論旨展開にも類型がある。表 8 ～表 11 では、紙幅の制限から論旨の展開枠組みの簡便な表示と、行為の表現戦略について短い説明を加えたのみである。今年度のライティング分科会の報告では、具体例を伴った詳細な説明を加えたい。

昨年度のライティング分科会の報告書では、2 つの段タイプに対応する話題文（主張文）－意志技法の段タイプでは主意の主張文が用いられ、共感技法の段タイプでは、含意の主張文を用いることを提案した。実在性の観点からみた話題の特徴や性質を考えると以下のようになる（表 12、[4]：60 頁から引用し再掲）。

合目的な表現態度の観点から、ライティング段階ごとにミクロな論旨展開に応じる主張文があるだろう。上記も含め、今年度、ライティングルール案を確定したものにしたい。

ところで、脳を模したニューラルネットを使う深層学習が成果を挙げ、現在（第 3 次）の AI が生まれたという。帰納推論的な仕組みは、その実装のための計算コストが

表 12　二つの主張文

話題文	主意の主張文（意志）	含意の主張文（共感）
主張文	（一方向の）関係を適用するに足る根拠が在ると判断する文	モノゴトの間に（一方向の）関係が在ると判断する文
関係の実在	（一方向の）関係（因果性）は世界に属する事実で所与である。根拠が事実であれば関係は成り立つ。	（一方向の）関係（因果性）は世界に属する事実でなく、認識者が事実性を認めることで関係が成り立つ（[21]：95 頁）。

高いといわれているが、実現の背景には、コンピュータの計算能力･処理能力が向上したことがある。さらにデータの特徴量を直接判断できるようになったことで、多数のデータ（結果）から原因－結果を妥当とする関係性を求められることに可能になったと考えられる。これは、原因－結果の因果性が明示的でない帰納推論的な仕組みの自動計算の発展といえる。

本稿で示したように、日本語は外界認識のため「モノである」という表現を選好して用いている。そして論旨の展開枠組みは帰納推論的である。こうしたことから帰納論理に基礎を置くような形式化を通じ、日本語の文法枠組みを説明することは甚だ妥当な方向ではないかと思う次第である。

参考文献

[1] 日本語マニュアルの会，“日本人のための日本語マニュアル（暫定第 1 版）,” 11 2018. [オンライン]. Available: http://ngc2068.tufs.ac.jp/nihongo/htdocs/.

[2] 米盛裕二，パースの記号学，勁草書房，1981.

[3] 森岡健二，文章構成法　■文章の診断と治療■，至文堂，1963.

[4] 一般財団法人日本特許情報機構　特許情報研究所，“平成 30 年度　産業日本語研究会　報告書「産業日本語」,” 一般財団法人日本特許情報機構，2018.

[5] 米盛裕二，アブダクション　仮説と発見の論理，勁草書房，2007.

[6] 三浦俊彦，論理学入門　推論のセンスとテクニックのために，日本放送出版協会，2000.

[7] 野家啓一，科学哲学への招待，ちくま文芸文庫，2015.

[8] カール・ライムント・ポパー著　大内義一他訳，科学的発見の論理（上），恒星社厚生閣，1971.
[9] “演繹法･帰納法とは，”18 9 2018. [オンライン]. Available: https://www.missiondrivenbrand.jp/entry/thinking_deduction_Induction.
[10] ＤＩＡＭＯＮＤハーバード・ビジネス・レビュー編集部【編訳】，説得の戦略，ダイヤモンド社，2006.
[11] 橋本淳一郎，時間はどこで生まれるのか，集英社新書，2006.
[12] ドナルド・D．ホフマン　原淳子・望月弘子訳，視覚の文法　脳が物を見る法則，紀伊国屋書店，2003.
[13] ディヴィッド・イーグルマン　太田直子訳，あなたの知らない脳，ハヤカワ書房，2016.
[14] 宮本啓一、石飛道子，ビックリ！　インド人の頭の中　超論理思考を読む，講談社，2003.
[15] ユクスキュル／クリサート著　日高敏高・羽田節子訳，生物から見た世界，岩波書店，2005.
[16] 一ノ瀬正樹，英米哲学入門，ちくま新著：筑摩書房，2018.
[17] 佐野洋，“モノの見方と時間の解釈（動きの表現），”電子情報通信学会，思考と言語研究会技報，2018.
[18] 中村元，東洋人の思惟方法Ｉ　インド人の思惟方法，春秋社，1988.
[19] 佐野洋，物の見方の二重性と言語表現，Japio YEAR BOOK 2018: 日本特許情報機構，2018.
[20] スティーブン・マンフォード、ラニ・リル・アンユム著、塩野直之　谷川卓訳，哲学がわかる因果性，岩波書店，2017.
[21] 飯田隆，規則と意味のパラドックス，ちくま文芸文庫，2016.